HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヒルファディングの「組織された資本主義」論（2）
Author(s)	上条，勇
Citation	北海道大學　經濟學研究，27(3)，141-175
Issue Date	1977-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31396
Type	departmental bulletin paper
File Information	27(3)_P141-175.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ヒルファディングの「組織された資本主義」論 (2)

上条　勇

序　「組織された資本主義」論の形成過程
Ⅰ　「組織された資本主義」論の理論構造
　1，2（以上前号）
　3，4，5，6（以上本号）
Ⅱ　「経済民主々義」論
Ⅲ　「現実的平和主義＝超帝国主義」論
　むすび

3．前稿で触れたように，ヒルファディングは，1924年の論文「時代の諸問題」において「組織された資本主義」への発展の一般的展望をあたえ，戦後の不安定要因さえ克服されれば，戦争によって拡大した工業生産能力を基盤にして，景気の昂揚が開始されるであろう，という見解を示した。しかし現実にはこの1924年末からいわゆる「安定恐慌」が生じ，大戦をへてドイツが保有してきた工業生産能力のかなりの部分がすでに不良であることをさらけだした。この「安定恐慌」を契機にしてドイツ資本主義は，ベルサイユ体制によって規定された戦後の経済的諸条件に適応するために，生産性向上をめざして合理化運動を本格的に展開し，その結果はじめて一定の景気上昇の局面，いわゆる「合理化景気」をむかえることになるのである。こうした事実経過をみながら，ヒルファディングは，1926年の論文「政治的諸問題」のなかで恐慌のピークが過ぎ去り，多くの経済部門で収益能力の回復と資本不足のおおよその克服がなされたと確認した[1)]。そして1927年の社会民主党（以下ＳＰＤ）キール大会での演説において，合理化運動の成果をふまえつつ，「組織された資本主義」の到来を確言した。彼はまた，1927年末のハンブル

ク海外クラブ（Überseeclub Hamburg）での講演において，「組織された資本主義」の世界経済的発展を，工業化・組織化・国際化という三つの特徴によっておさえ[2]，ドイツの経済的発展についてつぎのようにのべている。すなわち，ドイツ経済は，1927年には量的に戦前最高水準を凌駕し，質的には合理化によってより高度な技術水準にたっしたのであり，組織化と国際化の面で西欧諸国をリードしている，と[3]。このようにドイツ合理化運動の評価は，ヒルファディングの「組織された資本主義」論にとって重要な位置を占めている。以下では，合理化にかんする彼の見解を紹介し検討することにしたい。

「合理化」(Rationalisierung）は，はじめ，ドイツ労働組合総同盟（以下ＡＤＧＢ）の側から1925年９月のブレスラウ大会で積極的に提起せられた。これにたいして，1925年12月，ドイツ工業全国同盟（Reichsverband der deutschen Industrie）は建議書「ドイツ経済および財政政策」を発表し，資本家的組織の側からも安定期におけるドイツ経済の進むべき道として合理化を指示した。ＡＤＧＢは，1926年２月，それにたいする回答として，意見書「ドイツ経済政策の現在の任務」を職員自由組合連合（ＡｆＡ）およびドイツ官史組合総同盟（ＡＤＢ）との連署で出し，合理化が福祉向上と結びついたものであるべきことを強調した。こうしてドイツ合理化運動が労資協調下に全国民的規模で展開されたのである[4]。

ところでＡＤＧＢの合理化へのかかる対応に一定の方向づけをあたえたのは，故服部英太郎氏が指摘しているように[5]，ヒルファディングの「組織された資本主義・経済民主々義」論であった。ヒルファディングは，前掲論文「時代の諸問題」のなかで，経済民主々義――これについては次節で取り扱う――における労働組合の重要な一課題として「民主的生産政策」を掲げたが[6]，この「民主的生産政策」こそ労働組合の側からの合理化要求にひとつの指針をあたえたのである。この「民主的生産政策」に関連してヒルファディングはつぎのようにのべている。

> 「私はそれ(『資本家的精神』の諸作用―― 引用者）を組織された経済の創造のなかにみる。そのことからつぎのような問題が生じる。すなわちいかにこのすで

に組織された経済を，その階層的形態から別の形態つまり民主的な形態に移すべきか，という問題である。この任務のためにわれわれは貧困化し頽廃した資本主義ではなく力にあふれた資本主義を必要とする。というのは相続者にとって遺産ができるだけ豊富であるならば非常に快いからである。[7]」

これは1926年9月にウイーンで開催された社会政策協会の大会の席上，西欧資本主義の没落か再建かという問題に答えての発言である。この発言のなかにドイツ合理化運動にたいする積極的な協力を労働組合に薦めるヒルファディングの「民主的生産政策」の意図がうかがわれる。つまり彼のいう「民主的生産政策」とは，階層的に組織された資本主義経済から民主的に組織された社会主義経済への転換をめざす経済民主々義運動の一環ないしは基盤として資本主義の生産力上昇を追求する労働組合の政策だったのである。このように彼は，経済民主々義の観点から合理化の意義を認めた。このことは，ドイツ合理化運動にたいする彼の評価をも規定していたといわねばならない。

ヒルファディングは，ドイツ合理化運動について明確な規定をおこなっていない。が，前述のハンブルク海外クラブでの講演から，われわれは，彼がそれを，戦後の経済復興と賠償支払いのための国際競争能力増大をかけた国民的な生産性向上運動と理解していたと推察しうる[8]。そして彼が，合理化運動を「組織された資本主義」の生産力的基盤を準備し，さらにそのひとつの特徴を形成するものとして位置づけていたといえよう。

ヒルファディングは，以上の見地にたって合理化の成果としての生産力発展の内実に注目したと考えてよい。生産力発展の具体的内実が何であるかについては，論稿や演説により必ずしも一様ではない。したがってわれわれは，合理化に関係するヒルファディングの叙述を抜きだし，それにコメントする形で，彼の合理化論を検討することにしよう。

前掲論文「時代の諸問題」において，ヒルファディングは，近年，動作研究や労働の心理学的および生理学的研究がさかんになってきている点に技術のあたらしい発展傾向をみとめ，そのことによって労働の伝統的方法から合理的方法への移行が成就されつつあると指摘している。これは労働方法

(Arbeitsverfahren) の合理化とよばれるもので，ヒルファディングは，テーラーの科学的経営管理を採用し発展させようという当時の動きを，「組織された資本主義」における労働関係の変化と経済民主々義の問題との関連で指摘したのである。[*9)]

＊　ヒルファディングは，かかる労働方法の合理化が「労働の一面化と荒廃」を生みだす側面をもつと指摘している。だが，彼はこれを技術的発展の宿命的な産物とみて，合理化に反対することを時代錯誤だときめつけ，それにたいして労働者の文化的向上に合理化の成果を利用すべきだとのべている。[9)]

1925年のハイデルベルク綱領演説では，ヒルファディングは，進行中のドイツ合理化過程を「技術的発達と経済的独占化の過程」と把握してつぎのようにのべている。

今日，技術革命が二つの側面で急激に進行している。第一に，動力革命で，「石炭の地位が燃焼法 (Verfeuerung) の改善，[*] 水力からの電力の生産によって，さらには石油燃料への移行によって動揺させられている。石炭の古い地位は，おそらくあらたな技術革命すなわち石炭液化によって再生されるだろう。」第二に——より重要なのだが——労働方法の革命化である。今や農民の労働から機械工の複雑労働までが科学的に研究され，生理学的に検査され，その効率と強度について心理学的に探究されている。労働はますます分解され，この分解はまたさらにあらたに機械装置の使用に導く。そしてそれらは過程の連続性原理（流れ作業 Fließarbeit を意味する——筆者）にもとづいた経営組織に集約される。[10)]

＊　ここでいう新燃焼法とは，おそらく褐炭などの効率的利用をめざして開発された塵炭炉 (Kohlenstaubfeuerung) の，炭粉を燃焼室に吹きこみ着火・燃焼させる方法を意味する。動力源の褐炭への推移は，ドイツ工業のかなりの部分を褐炭の豊富な中部ドイツへ移転させる一原因となった。[11)]

ヒルファディングはこのように当時の「技術革命」の特徴を説明し，この「技術革命」が生産力上昇をもたらす一方，生産諸力の少数資本家的寡頭制への独占化にみちびいたことを指摘している。そしてそれとの関連で——前

稿で触れた――合理的生産をおこない，最少費用で最大の生産性をあげるために，ドイツ経済のカルテル組織からトラスト組織への移行が進められていることに言及しているのである[12]。

以上のことから，われわれは，ヒルファディングが進行中のドイツ合理化過程の特徴を，エネルギー革命，「科学的経営組織」(wissenschaftliche Betriebsorganisation) の導入，トラスト形成の三点においてとらえたということができよう。彼のこの着眼は，高圧送電技術の進歩にもとづいた水力発電所の建設，中央発電所への動力生産の集中と全国的配電網の形成，それによる電力価格の低廉化がもたらした電力使用の普及，内燃機関の進歩と交通業の発展に結びついた石油の灯油から燃料油への移行，技術のシステム化（テーラーシステム，フォードシステムなど）そして大トラスト形成による経営の統廃合，経営間分業の促進といった当時の生産力発展の方向を反映しているといえる[13]。しかし，ここでは，当時のドイツ経済の構造的変化に結びついたもうひとつの重要な点が未だ触れられていない。すなわちそれは化学工業（装置産業）の発展である。

ヒルファディングは，前掲論文「政治的諸問題」において，如上の合理化過程の展開をふまえ，ドイツの景気回復を指摘したが，さらに合理化過程の一結果として，ドイツ産業構造の質的変化を明らかにし，合理化と独占資本の再編に関連して重要な論点を提供している。これについて彼はつぎのようにのべている。

> 「ドイツ産業の構造は講和条約によって重大な変化をこうむった。エルザス・ロートリンゲンとオーバーシュレージェンの損失，ザール地方の一時的な分離によって重工業の比重が減少した……
>
> 原料領域の分離によるドイツ重工業の量的弱体化は恐慌いらいドイツ産業の構造における質的変化をともなった。指導部は完成品産業あるいはより正しくは戦前のライン・ヴェストファーレンの重工業とことなるタイプの産業集団にますます移される。というのは生産手段産業と完成品産業とのあいだの区別は，統合化と集中の今日的段階においてはもはやまったく適当ではないからである。原料産業が非常に重苦しく懊悩したのと同じ時期に，たとえばドイツ電機工業は技術更新と財政堅実化によってその地位を確定したが，何よりも化学工業が今日すべて

の産業にたいして優勢な地位を獲得した。それは，11億マルクの資本をもつドイツ最大の企業で，世界最大の企業のひとつである。多種多様の以前分離されていた生産業種を自己に統合して，それはドイツ経済のもっとも重要な諸部門に一部は金融的に関係し，一部は生産技術的に関係する。ほとんど自足的でそしてドイツ重工業から独立して，その石炭液化方法は逆に重工業を自己に従属させる。混合肥料の製造は，ドイツカリ工業をそのパートナーにし，そのさい化学大コンツェルンがその金融的強さからいって優越者となる。繊維産業の染料供給者は，人絹の生産者として繊維産業をその構成部分―― その意義が急速に増加するのだが――にする。そして10億マルクコンツェルンはドイツの諸大銀行に対等にたちむかう。デューイスベルク氏がＩＧの監査役会会長と全国工業同盟議長を結びつけた人的結合は，化学大工業の指導的地位を明白にする。」[14]

このようにヒルファディングは，ベルサイユ条約によってドイツ重工業が原料基盤を奪われ，その地位を後退させたが，それにたいして合理化運動の展開のなかで，化学・電機工業とくに化学工業がめざましい発展をとげ，ついには支配的地位を獲得したとのべている。確かにこの時期に化学・電機工業が重工業に比肩しうるほど成長して，ワイマール期にはドイツ工業全体を指導する地位についた。それらの成長は，産業構造の一定の変化をもたらし，両大戦間ドイツ資本主義の発展のてこになった。[15] この点に着眼したことで――ドイツ鉄鋼業の急速な再建とそれが全産業に依然として大きな比重を占めている点がまだのべられてないが――，われわれはヒルファディングのすぐれた洞察力をみるのである。彼はこうした化学工業の発展をふまえ，その生産力発展の特徴について，1927年のキール大会での演説においてさらにつぎのようにのべている。

「組織された経済は――標語的にいえば――技術的には，蒸気・電気とならんで合成化学がますます前面にあらわれ，そしてそれがおよそ半世紀後に工場技術的応用に耐えうるほど科学的に発展することによって特徴づけられる。」合成化学の発展と応用は，資本主義的生産の技術的総基盤を爆発的に変革するほどの原理的にあたらしい問題を生みだす。第一に，それはどこにでも大量に存在する無機材から重要な原料を人工的に製造して，資本主義経済を原料準備から解放することをめざす（その例としては石炭液化が注目され，

これが石油の油田獲得をめぐる国際競争の問題を解決するだろうとのべられる)。第二に，原料を工業的処理に適した形態に変えるか，それにまったくあたらしい属性をあたえる。第三に，人絹のように廉価な無機材から高価な有機材を産出する。[*16)]

＊　合成化学の発展に関連していえば，ヒルファディングは，すでに第一次大戦前に化学工業の急速な拡大に注目しており，マタレの装置論を取りあげてその紹介論文を書き，労働手段としての装置の重要性を強調している。[17)]

このようにヒルファディングは合成化学の発展に技術的にあたらしい三つの特徴をみる。第一に，タール染料，空中窒素固定などにみられるように化学工業がもともと有していた，天然資源から生産を解放する傾向のいっそうの発展を，石炭液化の事例をひきつつ確認している。第二に，たとえば，石炭を種々の成分に分解して有効に利用することをめざした石炭化学の発展をそのおもな内容として，原料の性格の変化をのべている。第三に，不振の繊維のなかでめざましい拡大をみせていた人絹の例をあげて，高級品の低廉な生産，したがってその大衆消費財化を指摘している。

ヒルファディングはなかでも第一の点を重視したように思われる。つまり彼はこうした発展の方向に資本主義が原料資源の自然的制約から解放されることを見とおした。そしてたとえば石炭液化の発展に，当時懸案問題化していた石油資源の国際争奪戦の解決の糸口を見いだしたのである。結局，ヒルファディングは，このような意味で，合成化学の発展について「組織された資本主義」の確固たる生産力基盤の形成を期待したといえよう。かかるヒルファディングの見解にたいし，われわれはむろんコスト面で石炭液化装置の実用化が妨げられ，その後石油資源がますます重要な経済的意義を獲得したことで，彼の見とおしが誤まっていたことを指摘しうる。が，その反面，資本主義の発展がその後，合成化学の発展＝重化学工業化によって一面では規定されたのであり，この事実に着眼した点でヒルファディングを評価することを忘れてはならないだろう。

さて，われわれはこれまで生産力発展の内実や産業構造の変化などを中心

にして，ヒルファディングの「合理化」論を論述してきた。以下では合理化運動の成果とドイツ経済全体の関係に言及しておこう。1927年12月，ハンブルク海上クラブでの講演（前掲）において，ヒルファディングは，合理化過程とドイツ経済の繁栄の関係について総括的につぎのようにのべている。

1924年の通貨安定いらいのドイツの経済活動（合理化運動）の成果をみると，まず海運業は，最新鋭船で戦前の4分の3にあたる船舶を保有するにいたった。石炭業は，過剰生産傾向をかかえながらも，不良鉱山の閉山や機械化によって出炭力と収益力を回復した。鉄鋼業はラインの左岸で失ったものを右岸で再建し，月平均生産高において1913年水準を上まわっている。化学工業は，窒素のほか石炭の液化，人絹生産そして部分的には新生産部門でいちじるしい経済的成果をおさめた。ドイツは「生産を再建したのみでなく，それをまた合理化した。」多くの生産部門において高水準の技術的転換と生産性の上昇が成就された。その結果，ドイツの総生産は，1913年の生産指数を100とすれば，1927年下四半期に108まで増加したのである。

ヒルファディングは，このようにドイツ経済が合理化運動をとおしてわずか数年のあいだに飛躍的に再建されたことを確認している。そして今やドイツが経済の組織化と国際化の点でヨーロッパ諸国をリードしていることを強調している。しかし，他方で彼は，こうしたドイツ経済の繁栄が巨額の外資導入に支えられ，さらに賠償支払いといったきびしい現実問題をかかえていることも指摘せねばならなかった。

彼によれば，ドイツ経済はその国際競争力と世界市場での地位を回復するために急激な技術転換と投資活動すなわち合理化運動を不可避としたが，ドイツ国内での資本形成はこの投資需要を満足しえなかった。それゆえに外資がドイツ経済の合理化資金として導入されたのである。ドイツの貿易収支の赤字をあげて外資が賠償支払いのために導入されたと主張するものは，この現実的関係を見ていない。貿易収支が当面赤字であるにしても，これは合理化に必要な資材の輸入によるものであり，一時的であろう。ドイツ経済が合理化を成就するにつれて，外資の導入と貿易収支の赤字も減少するにちがい

ない。[18]

ヒルファディングの如上の発言は,「組織された資本主義」論の現実基盤がいかなるものであったかを示している。ヒルファディングは，世界資本主義の相対的安定下でのドイツ経済の再建および繁栄を基盤にして,「組織された資本主義」を唱えた。だが他方で，ドイツ経済が外債への依存と賠償問題といった不安材料をかかえていることも指摘せねばならなかった。彼の講演の２カ月前の1927年10月，賠償支払総代表人Ｓ・Ｐ・ギルバードがドイツ政府に書簡を送り，外債の累積化にたいして警告を発した。ヒルファディングはこのギルバードを批判して，ドイツ経済の高度な繁栄を強調し，外債の導入と貿易収支の赤字が一時的問題だと主張したのである。彼はまた別の一論において，ギルバードと同様の見解を唱える――外資が浪費的使用と賠償支払いのために導入されていると主張する――ライヒスバンク総裁シャハトを批判して，つぎのようにのべている。すなわち外国信用は政府によってではなく公私の事業団体によって生産の再建か合理化のために使用されたのであり，浪費的費消は一部にすぎない。賠償は外国信用からではなく，それによって促進された生産の拡大と増収から支払いうるのだ，[19]と。しかしこのヒルファディングにしても，信用不安と外資の引き揚げが生ずるようなことがあれば，ドイツ経済が破産することを認めないわけにはいかなかった。[20]のちに世界恐慌が勃発したとき，彼はドイツから資本を回収した外国資本家の私的行動にその主要原因のひとつを見いだしたのである。

以上，われわれはドイツ経済の合理化過程にかんするヒルファディングの見解をみてきた。小括すると，ヒルファディングは,「組織された資本主義」の生産力的基盤を明らかにする観点から，合理化における技術的諸転換の特徴をおおむね的確にとらえたということができる。われわれは，20年代ドイツ資本主義が，動力革命（中央発電所への動力生産の集中と電力の低廉化など),電力を基礎にした技術のシステム化，トラスト形成による経営間分業の促進，重化学工業化をおもな内容として，生産の社会化の高度な進展をとげたことを確認しうるのである。しかしその半面，ヒルファディングは,「組織

された資本主義」の観点に制約されて，合理化運動の歴史的および経済的意味にかんする深い洞察にはいたっていない。ドイツ合理化運動は，第一次大戦後帝国主義の世界体制（ベルサイユ体制）によって規定された経済的諸条件への敗戦国ドイツの適応運動，換言すれば戦後「危機」からの脱出を志向したドイツ独占資本の再編強化と強蓄積の運動を意味していた。この過程で大規模な技術的更新がなされドイツ帝国主義の復活がおし進められた[21]。ヒルファディングは，このうちほとんど技術的更新に注目するにとどまった。合理化運動の真の意義をとらえるには，合理化過程と独占資本の蓄積運動の関係，独占資本の戦後的展開にたちいる必要があったのではあるが。確かにヒルファディングは，トラスト形成の動きを指摘している。だが，彼はこれに資本主義の組織化と計画化の傾向を見るにとどまった。彼はまた，重工業にたいする化学・電気工業の台頭と産業構造の質的変化に注目した。だが，これはデューイスベルク（ＩＧファルベン監査役会会長）とジルヴァベルクらの全国工業同盟指導部の親社会民主党路線や[22]，化学・電機資本家の労働組合にたいする友好的態度および平和主義的外交政策を歓迎する意味で注目したのにすぎない[23]。つまりこの点に彼は経済民主々義運動にとって有利な条件を見いだそうとしたのである。

結局，合理化運動にたいするヒルファディングの評価の特徴は，彼のつぎのような発言に明瞭に示されている。すなわち彼は，後述のごとく，ドイツ経済性管理局やドイツ規格委員会など公的機関によって合理化が推進されたことを，経済管理の私的用件から社会的職務への移行を示す事実としてあげている。また合理化運動における企業家の役割を取りあげて，個別的経営のレベルで生産を技術的組織的に上昇させるその努力が社会的利益に合致し，公的職務を遂行するものだとして賞揚した[24]。このようにヒルファディングは，合理化運動を労資共通の課題を意味する国民的生産性向上運動と理解したのであり，そのなかに独占資本の強蓄積とドイツ帝国主義の復活の過程をみなかったのである。その結果，合理化運動が一面では労働強化をともない，その展開過程であたらしい矛盾――大量失業，過剰生産など――を生みだし，

結局は戦後帝国主義の世界経済的諸条件と衝突して大恐慌をまねくにいたる，という側面を明らかにしえなかった。大恐慌はヒルファディングの「組織された資本主義」論を根底から動揺させたのであるが，このときになってはじめて彼は合理化についてもつぎのようにのべるにいたったのである。

> 「われわれは他のヨーロッパ諸国と同様にドイツにおいて，戦時中とくに合衆国で成就された全技術的成果が，ほぼ1924年に一時的に集中的に導入された現象をみる……この合理化すなわち科学的経営組織と技術進歩の結合は，労働者の解雇の急激な進行をもたらしたのであり，……いわゆる技術的失業[25]の原因である。」（傍点隔字体）

つまりヒルファディングは，この時点では，合理化を戦争の結果である技術的諸成果の一時的集中的な導入と特徴づけ，一時的に集中的に導入されたがゆえに過剰生産と失業ひいては恐慌の一原因をなしたとのべている。*彼はいまや，例のめざましい技術的転換の過程を戦争の後遺現象のひとつで精算されねばならぬものとみなす。そして大恐慌を引き延ばされた戦争の精算過程とみなし，この精算過程をへてはじめて正常な軌道にのった「組織された資本主義」の時代が到来すると唱えたのである。われわれはやはり合理化運動の評価の誤まりに，ヒルファディングの「組織された資本主義」論の根本的欠陥が示されているのをみる。

* われわれはこれと類似した見解をオットー・バウアーの合理化論にみる。バウアーは戦争によってもたらされた技術的諸変革が短期間に集中して採用され，ひとつの革命的発展段階を形成したと技術的合理化の過程を特徴づける。そして爆発的な設備更新過程が短期間に集中し，そのあとに中断の時期をまねいたがゆえに，「合理化恐慌」が生じたという。バウアーは設備更新の無計画的な集中に景気循環の原因をみとめ，「合理化景気→合理化恐慌」をこの景気循環の特殊な種類とみなしている[26]。したがって第一次大戦後帝国主義との関係で合理化運動をみない点で，ヒルファディングの合理化論と共通の欠陥を示している。

1) R. Hilferding, Politische Probleme, in : Die Gesellschaft, 3. Jg. Bd. 2, 1926, S. 301.
2) R. Hilferding, Deutche und internationale Verschuldung, in : Überseejahrbuch

Hamburg, Bd. 5, 1928, S. 55 ff.

3) a. a. O., S. 61～62.

4) 有沢広己・阿部勇共著『産業合理化』経済学全集34, 改造社版, 149～153ページ。服部英太郎『ドイツ社会政策史(上)』著作集Ⅰ, 未来社, 1967, 88～90ページ。

5) 服部英太郎, 同上, 第1・2章。

6) R. Hilferding, Probleme der Zeit, in : Die Gesellschaft, 1. Jg. Bd. 1, 1924, S. 7.

7) R. Hilferding, in : Verhandlungen des Vereins für Sozialpolitik in Wien 1926. Schriften des Vereins für Sozialpolitik, Bd. 172, 1926, S. 115.

8) R. Hilferding (Anm. 2), S. 61 ff.

9) R. Hilferding (Anm. 6), S. 6.

10) R. Hilferding, Programmrede auf dem Heidelberger Parteitag, 1925, in : Protokoll……S. 280.

11) Otto Bauer, *Kapitalismus und Sozialismus nach dem Weltkrieg*. Bd. 1 : Rationalisierung-Fehlrationalisierung, Wien, 1931, SS. 13～14より。

12) R. Hilferding (Anm. 10), S. 280～281.

13) 大泉英次「1920年代ドイツ資本主義論への視角 ―独占資本主義と『国民経済』――」(北大経済学研究26(1)1976・3) 186～187ページを参照。なおアメリカについては森杲『アメリカ資本主義史論』ミネルヴァ書房, 1976, 第6章三を参照。

14) R. Hilferding, (Anm. 1), S. 291～292.

15) 工藤章「<研究ノート>相対的安定期のドイツ化学工業」(社会科学研究28(1) 1976) を参照。

16) R. Hilferding, Die Aufgaben der Sozialdemokratie in der Republik. (Rede auf dem Parteitag der SPD zu Kiel. in : Protokoll……) 1927, S. 166.

17) R. Hilferding, Eine neue Untersuchung über die Arbeitsmittel, in : Die Neue Zeit, 32. Jg. Bd. 1, 1913/14, SS. 981～985.

18) R. Hilferding (Anm. 2), S. 61 ff.

19) R. Hilferding, 〔Bücher〕 Adolf Weber : Hat Schacht recht?――Die Abhängigkeit der deutschen Volkswirtschaft vom Ausland, in : Die Gesellschaft, 5. Jg. Bd. 1, 1928, SS. 182～184.

20) R. Hilferding (Anm. 2), S. 63.

21) わが国における研究では, ドイツ合理化運動にかんして, 必ずしも私のように積極的評価があたえられているわけではない。むしろ積極的評価と消極的評価に分かれている。これについては安保哲夫「資本輸出分析ノート(二)相対的安定期ドイツの産業合理化とアメリカの資本輸出」(社会労働研究17(3・4) 1971) を参照。

22) 栗原優「ワイマール・デモクラシーと工業団体」(歴史学研究, 別冊特集, 1976・

11）145～146ページを参照。
23）R. Hilferding (Anm. 1), S. 292.
24）R. Hilferding (Anm. 16), S. 168.
25）R. Hilferding, Gesellschaftsmacht oder Privatmacht über die Wirtschaft (Referat gehalten auf dem 4. AfA-Gewerkschaftskongreß Leipzig 1931) Berlin S. 11.
26）Otto Bauer (Anm. 11), S. 184 ff.

4．ヒルファディングは,「組織された資本主義」が発展し完成するにつれて，労働者の機能差別化が進行し，労働者が未熟練・半熟練・熟練労働者，職員層の各段階に分化するとのべている[27]。彼は「組織された資本主義」におけるこの方向性，労働者の生活向上それに株式会社における「所有と機能の分離」傾向から，事実上社会の階級関係の変化を認めるにいたっている。以下，この点にかんしてヒルファディングの所論を整理紹介しよう。

ヒルファディングは，論文「時代の諸問題」において，労働者の階層分化の傾向が科学技術の応用と生産力の発展に応じて歴史的必然的に生ずるという理解を示している。とくに前述の「科学的経営組織」によって，分業と労働の特殊化が進行し労働者の階層分化が強力に促進されると考えている。そしてその結果「労働者軍は官吏と似たような性格をもつ職員の種々に細分化された階層に組織される」というのである[28]。

このようにヒルファディングは,「科学的経営組織」などによって労働者の機能分化と専門化が促進され,「組織された資本主義」において労働者が階層的に組織されると指摘しているが，なかでも彼が注目するのはいわゆる「新中間層」の増加である。これについて彼は，前述のハイデルベルク綱領演説において，つぎのようにのべている。

大経営の拡大，それに商業と産業における経営組織の内部変革による経済発展は，精神労働者とか頭脳労働者とかよばれる労働者層を生み出した。彼らは生産過程の必要な構成員になったのであり，組織，監督などの重要な機能をはたしている。プロレタリアートと同様に彼らは経営の集中によって組織されており，その特殊利害を意識し，そして特権的地位への昇進機会から

排除されている。あらゆる種類のこの職員層は，とくに都市内でますます重要な役割を演ずる。その数は資本主義的発展の最近の10年間に本来のプロレタリアートより急速に増加している。[29)]

ところで「新中間層」の増加について，ヒルファディングはすでに1910年の主著『金融資本論』において，つぎのようにのべていた。

商工業におけるサラリーマン層——彼は，この層が不当にも『新中間階級』とよばれているという——は，つぎの二つの理由からプロレタリアートの成長をしのぐ増加を示している。第一に，大経営の発展と有機的構成の高度化である。これは，労働者の相対的あるいは絶対的減少をもたらす反面，技術者の監督の意義を高め，その要員を増加させる。第二に，株式組織の発展による所有と指導（Leitung）の分離である。これは，指導を高齢の賃金労働者やサラリーマンの特殊機能にする。株式会社の急速な発展は，これらの層を増加させる。

ヒルファディングは,『金融資本論』においては，巨大経営の拡大が下層の地位ほど上層の地位の数を増加せず，また産業と銀行による大独占の結成がかえって最高の技術的地位を減ずるという理由をあげて，サラリーマンの政治的動向についてつぎのような見とおしをたてた。すなわち，サラリーマンの境遇の悪化傾向がサラリーマン諸層と資本家との対立を尖鋭化し，結局サラリーマンの下層部がプロレタリアートの戦列に加わるようになる，[30)]と。

ヒルファディングが1925年にハイデルベルク綱領演説で「新中間層」をふたたび取りあげたのは，独占的企業の巨大な発展にともなう経営の管理部門の膨脹と専門化，販売・広告その他のサービス部門の比重の増大，都市化現象などといった当時の資本主義的発展現象の一端を彼なりに捕捉したからにほかならない。しかし彼はこの事実にかんする堀り下げた分析をおこなわず*，「新中間層」の増加から，「組織された資本主義」における生産関係の位階的性格を指摘するにとどまっている。そして増大した「新中間層」を，後述の経済民主々義実現のために不可欠な政治的経済的勢力とみなして，この層を社会主義陣営に獲得する必要性を訴える意味で，この事実に触れたのに

すぎない。彼は，その理由から，職員運動AfA（Allgemeiner Freier Angestelltenbund）の成長に注目している。[**31)]

＊　オットー・バウアーは，前掲書において，合理化運動の担い手として技術者がはたした積極的な役割を評価し，それとの関連で経営の管理部門の膨脹と専門化――彼によれば産業ビュロクラシー（industrielle Bürokratie）の急速な発展――について比較的詳しい分析をおこなっている。[32)]

＊＊　「新中間層」の増大の意義とそれを獲得することの重要性は，ＳＰＤハイデルベルク綱領（1925年）[33)]とオーストリア社会党リンツ綱領（1926年）[34)]のなかでも確認されており，当時の社会民主々義者のあいだでひとつの重要な課題として意識されていた。

かくしてヒルファディングは，労働者の階層分化や「新中間層」の増加を「組織された資本主義」における労働関係の重要な変化としてとらえ，そしてこの点に事実上階級関係の変化を見いだしているようにみえる。前述のごとく彼は「組織された資本主義」において，労働者が官吏のような性格をもった職員の種々に細分化された階層に組織されるとのべている。彼のこうした見解は，マルクスの窮乏化法則にたいする否定と結びついており，事実上マルクスがあたえた労働力商品規定を放棄する考えにつながってゆく。

ヒルファディングは，「組織された資本主義」が恐慌の緩和ないしは解消そして社会改良（老齢保険，傷病保険，失業保険）などによって労働者の窮乏化傾向をほとんど克服したと認識している。[35)]とくに賃金が組織された労働者と資本家の力関係によって政治的に規定されるようになっていらいそうだというのである。[＊]彼は，階級闘争が貧乏人の富者にたいする闘争ではなくなり，闘争の焦点も貧困問題ではなくなるとさえのべている。[36)]

＊　同じ時期に，合理化運動とのかかわりで多くの社会民主々義者がいわゆる生産性賃金論，政治的賃金論などを唱えて，マルクスの賃金論と窮乏化法則を修正ないしは否定する見解を示した。[37)]

こうしてヒルファディングは，労働者の社会的経済的地位の向上および階層分化という社会発展の認識から，労働力商品規定にもとづく労働者階級の

階級規定を事実上放棄し，労働者が官吏と同様の性格をもつようになったとのべるのである。この方向性は，彼が労働者階級概念とならんで次第に勤労大衆（arbeitende Massen）とか生産者層（Produzentenschaft）とかいう表現を併用しはじめている点にも示されている。

さて，労働者の階級的性格のこのような変化を認める一方，ヒルファディングは，資本家の性格にも一定の変化がみられると考えていたようである。これは株式会社制度の発展による「所有と機能の分離」の作用の結果である。彼は，すでに『金融資本論』のなかで，「産業株式会社は……産業企業家機能からの産業資本家の解放を原則的にもたらす」[38]とのべ，株式会社における「資本所有の資本機能からの分離」[39]を主張している。すなわち彼にあっては株式制度が即「所有と機能の分離」を意味しているのである。かかるヒルファディングの見解にたいしてはつぎのような疑問が提出されている。すなわち彼の「所有と機能の分離」論は，企業の支配にではなく配当の多寡に興味をもつにすぎない貨幣資本家＝群小株主によって株主の性格を規定したものであり，これは彼が別の個所でのべた過半数以下の株式所有で企業を支配する支配株主の規定と矛盾する，と[40]。しかし私はこういった理解には疑問をもつ。1932年のヒルファディングの論文「社会主義と所有」は，つぎのようにのべている。

> 「株式会社において結局社長（Generaldirektor）を頂点とする職員層に指揮機能や組織機能が移行するといった私的所有からの機能の分離が完遂される。
>
> われわれにとって何よりも興味深いのは，株式会社によって資本家的所有は，あらたに他人所有にたいする強められた支配権力を受けとるということである。1億マルクの株式会社を支配するためには51％の資本，実際には経験上より少ない率の資本所有で十分である。またこの51％の資本を支配するためには全然5100万マルクを必要としない。私はこの株式を資本金3000万マルクの他の株式会社にもちこみ，今や1600万マルクの資本でもってこの持株会社を支配し，それによって1億マルクの株式資本を支配する……たとえば最大のドイツ鉱山コンツェルンは，今日，事実上その私的所有が被支配企業の株式資本の小さな部分しかなさない大株主によって支配されている。」[41]

つまりこの論文でヒルファディングは，「所有と機能の分離」論と「支配株

主」論をいささかの矛盾も感じることなく並置し，のみならず前者を前提にして後者を展開しているのである。こうしたことから私は彼のいう「所有と機能の分離」論をつぎのように理解したい。すなわち，それは，生産過程における指揮機能や管理機能が本来の資本家から離れてその代理人に委譲され，本来の資本家は生産過程を外部から支配し，G—G′機能を純粋に追求するようになることを意味する，と。『金融資本論』では，「所有と機能の分離」論は，株主を貨幣資本家＝群小株主とする観点からではなく，群小株主と支配株主の両方を含む株主一般の本質規定をおこなったものである。したがってそれは具体的内容として，大株主による経営支配の規定を排除するものではない。ヒルファディングにあっては，支配株主の規定は，株主一般——経営の管理機能から解放されたたんなる擬制資本の所有者——を基礎とした株式所有の数量問題として提起されていると考えられる。結局，ヒルファディングの「所有と機能の分離」論は，経営管理者として資本家が無用化するということを内容としている。資本家は，生産過程を外部から支配する「所有特権者」となり，「組織された資本主義」においては，前の時代からたまたま(zufällig) 引き継いだ敵対的所有基盤によって社会的生産を支配し，社会的生産物の分配に決定的な影響をあたえるのである。[42)]

かくしてヒルファディングにあっては，「組織された資本主義」における階級関係はつぎのように規定されている。すなわち，階層的に組織された，生産過程の指揮機能をますますわがものにする，官吏に似たような性格をもった生産者大衆と生産過程の外部にたち社会的経済的特権をもつ所有者とのあいだの対立関係として規定されるのである。彼は，かかる「組織された資本主義」の階級関係のもとでは，社会主義運動がもはや貧困と窮乏を問題とするのではなく社会全体の利益と経営における昇進機会の平等化をめざした経済民主々義の運動として進められなければならないとのべている。

以上，われわれは「組織された資本主義」における階級関係の問題を紹介してきた。すでに指摘したように，ヒルファディングは，労働者の階層分化と社会的経済的地位の向上から，事実上その階級規定に変更を加えている。

さらに資本家を所有特権階級と規定している。そして結局「組織された資本主義」における階級対立を，生産者層と特権的所有者との対立に帰着せしめているのである。

われわれは，ヒルファディングが巨大企業の発展による経営管理部門の肥大化やサービス部門の比重増加にともなう「新中間層」の増加傾向，さらに資本主義のもとで労働の社会化が労働者の階層分化をともなっているという点に着目したことを一定評価できよう。確かにこのような労働者階級のなかでの構造変化は現代資本主義のかかえている重要な問題のひとつで，ヒルファディングはこの問題を萌芽的にとらえたのである。しかしその反面，彼は剰余価値生産にもとづく階級関係を，たんなる社会的経済的不平等関係（そのおもな内容は分配の不平等と経営における昇進機会の不平等など）に歪曲化している。われわれは，価値の自己増殖体としての資本の担い手が企業を最終的に支配する所有資本家と機能資本家――企業の最高意志決定に参加し，利潤の分配に参与する管理上層部――に二分されているのをみる。機能資本家は価値の増殖過程と実現過程を直接に担当する経営の最高意志決定者であるが，彼の地位はつねに所有によって裏づけられねばならず，彼の行動は結局は支配的所有者の意志を反映していなければならない。この意味で企業を支配する所有者――この所有者の関係も複雑化をへるのだが――と機能資本家は対をなしており，ひとつの資本家集団をなしている。ヒルファディングの場合，この機能資本家の規定があいまいになっており，それを生産者一般に還元する傾向があった。彼は，ただ経営の指導的地位への昇進機会が所有特権階級によって不平等化され，特権化されている点に生産者内部での対立点をみるのである。彼のこのような見解は――20年代アメリカにおける「株式の大衆化」現象などの観察から生じたバーリー＝ミーンズやバーナムらの「経営者革命論」とは多少性格がことなるが――後述の経済民主々義との関係で，いわゆる「テクノラート支配論」や「経営者革命論」に結びつくような性格を一面でもっていたといえよう。

27) R. Hilferding (Anm. 6), S. 5.

28) a. a. O., S. 2 f.
29) R. Hilferding (Anm. 10), S. 276 f.
30) R. Hilferding, *Das Finanzkapital*, 1910, Eingeleitet von Eduard März, Europäische Verlagsanstalt, 1973, Bd. 2, SS. 474～478. 林要訳『金融資本論』国民文庫版(2)299～304ページ。
31) R. Hilferding (Anm. 10), S. 277.
32) Otto Bauer (Anm. 11), SS. 118～128.
33) W. アーベントロート『ドイツ社会民主党小史』ミネルヴァ書房，1969，付録，183ページ。
34) ＜資料＞『ドイツ・オーストリア社会民主労働党のリンツ綱領』(田川恒夫訳，季刊・社会思想3―2，1973) 189～191ページ。
35) R. Hilferding (Anm. 6), S. 3.
36) R. Hilferding, Die Reichstagswahlen und die Sozialdemokratie (Rede auf dem Berliner Parteitag der SPD 1924), in : Protokoll, S. 165～166.
37) Kurt Langer, *Sozialdemokratische Wirtschaftstheorien der Nachkriegszeit*, Basel 1937, 6. Kapitel. 服部英太郎『賃銀政策論の史的展開』著作集Ⅲ，未来社，1971，第2篇第1章を参照。
38) R. Hilferding, *Das Finanzkapital*, Bd. 1, S. 136. 邦訳(1)206ページ。
39) a. a. O., S. 167. 同上248ページ。
40) たとえば，鈴木鴻一郎「『創業利得』について――ヒルファディングの株式会社論にたいする一つの疑問――」(楊井克巳・大河内一男・大塚久雄編『帝国主義研究』岩波書店，1959) 18～20ページ。
41) R. Hilferding, Sozialismus und Eigentum, in : Sozialistische Bildung, 1932. Jg., 1932, S. 28.
42) R. Hilferding (Anm. 6), S. 3, S. 6.

5．アメリカの1920年代は，独占体にとって「自由経済」下の繁栄を謳歌した時代だったが，それと対照的に同じ時期のドイツでは，いわば早熟の国家独占資本主義が出現した。それは，ドイツにおいて第一次大戦後資本主義の危機が集中的にあらわれ，その危機が生産の社会化の高度な発展とないあわさって，国家の経済介入を強く要求したからである。経済における国家の役割の増大という資本主義のこのあたらしい現象は，当然当時の社会主義者たちの注目するところとなった。コミンテルンでは，1928年ごろ，ラピンスキー，ブルム，ヴァルガを中心に，国民所得に占める財政の比重の増加，国

家の企業者活動などを内容とする国家独占資本主義論が論議された。一方，第二インターの理論家は，ヒルファディングをはじめ，国家を「組織された資本主義」論のなかに積極的に位置づけようとした。

ヒルファディングは，1927年の論文「農業問題への理論的評註」において，「経済管理（Wirtschafsführung）がもはや企業家の私事ではなく，公的職務とみなされはじめたことが，自由競争の経済とは反対に組織された資本主義経済の特徴的メルクマールのひとつである」とのべている[43]。「組織された資本主義」において経済管理が公的職務になるという見解は，ヒルファディングが国家の経済介入を説明するさいの基本的視点をなしている。以下，1924年の論文「時代の諸問題」と1927年のキール大会での演説を中心に，国家の経済介入にかんするヒルファディングの所論にもうすこしたちいってみよう。

「時代の諸問題」は，カルテル・トラストなどの資本家的諸組織と戦後に実現された民主国家の対抗関係についてつぎのようにのべている。すなわち，カルテルやトラストなどの権力中枢（Machtzentren）は，経済活動における法律上の平等権を支配従属という経済的内実によって破壊し，さらに国家を彼らの権力目的のために奉仕させようとする。しかしそれは，戦後に民主的基盤のうえに打ち立てられた政治組織と衝突するようになる。したがって資本家的諸組織はいまや行政官庁の組成や政党にたいしてあらゆる手段を用いて影響をおよぼし，その経済的権力を政治的権力に置き換えることに努める。それにたいして，「国家のカルテル政策は，いかにして可能になるのか？」*

＊　ヒルファディングは，ここでおもに1923年の経済的権勢濫用禁止令（通称カルテル規制令）を事実上念頭においている。この法令は，ライヒ経済大臣とカルテル裁判所にカルテル規制の大幅な権限を与えたものだが，条文の表現が抽象的であり，実際的運用上かなりの問題を残していた[45]。ヒルファディングは，かかる法令をいかに改善し，それに現実的意味をもたせるか，とい形で問題をたてているように思われる。

ヒルファディングは，その回答を，戦後に政治的自覚と政治的影響力を増大させた労働者組織の力のなかに見いだすのである。戦争は，生産者組織す

なわち労働組合の協力なくして遂行できなかったので，国家はその協力と引き換えに労働組合に一定の譲歩をおこなった。その結果，戦争は労働者の地位向上と力の自覚をもたらし，労働者を重要な政治勢力たらしめた。いまや「戦時中に無制限のように思われた国家の経済への力を，戦後に労働者が利用するといった意志がよび起こされた。」[46]

戦時統制経済は，国家の強権による経済の計画化の試みであった。第一次大戦中の諸論文で，ヒルファディングは，この戦時統制経済の観察から，「資本主義的独占と国家の連合」した諸力を頂点とする階層的に「組織された資本主義」あるいは「組織された国家資本主義」の可能性を考えた[47]。しかし戦争の終結とともに統制体制は解除され，独占的諸組織はふたたび「経済的自由」を獲得した。そこでヒルファディングは，「時代の諸問題」で，戦時中にみせた経済にたいする国家の力を，今度は労働者階級の利益のために利用することを提唱する。そしてこうした見解を，国家理論の面から裏づけることも試みているのである。

ヒルファディングは，国家を支配階級の組織とみなすマルクスの理論にたたいし，より「包括的な国家理論」の必要性を認めている。というのは，戦後に西欧において民主々義が広範な勝利をえ，民主国家形態の拡大がもたらされたからである。民主国家は，労働者階級の力によって実現され，労働者階級の擁護なくして存立しえない。それはもはや労働者にとって迂遠な存在ではなくなり，その政策決定に労働者の意志も反映される。[*48]

＊　同じ年の1924年の論文「現実的平和主義」において，ヒルファディングはつぎのようにのべている。民主々義によって「階級の政治的力関係が絶えずはかられ，そしてこの力の認識はそれを顧慮することを容易にする。さらにこの力は直接的に民主々義における国民の意志の合成力をなし，国家の意志決定をなすものである」[49]と。

かくてヒルファディングは，如上の「民主国家論」に依拠し，さらに戦後における労働者階級の政治的影響力の増大をバックにしつつ，カルテルの政治的規制など労働者階級の経済政策を貫徹させる手段として――戦時に経済

にたいして強力な権限を受けとった――国家権力を利用しようと考えた。そして彼は，経済の階層的組織（資本家的組織）と民主的組織（労働組合など）の対抗図式を描き，経済を民主的に規制ないし改革してゆく経済民主々義の運動の一環として，国家の経済介入を要求したのである。

以上のヒルファディングの見解は，1927年のキール大会での演説において，相対的安定期のその後の経過をふまえて，豊富化され体系化されている。この演説は，国家の経済介入を「組織された資本主義」のもっとも重要な特徴として指摘しており，合理化運動が公的諸機関によって指導されたという事実を確認してつぎのようにのべている。

> 「経済性管理局ならびに一般に官庁によって促進された合理化をめざすすべての諸機関は，経営の生産能率の引き上げを企業家に奨励したが，これは企業の管理がもはや企業家の私事ではなく社会的職務になったと社会が宣することを意味するにほかならない。」[50]

このようにヒルファディングは，合理化運動の経験から，経済管理が企業家の私事ではなく公的職務になったという結論を引きだすのである。*そしてそれを「組織された資本主義」の重要なメルクマールとみなし，さらには，「経営および経済管理が社会の職務として考えられる場合，それは社会主義的原理」を意味するとさえのべている。[51]

＊　ヒルファディングは，別の一論文で，同様のことをつぎのようにのべている。「フーバーの産業の無駄排除運動，たとえばドイツ経済性管理局，ドイツ工業規格委員会その他の定型化，よけいな分散の回避をめざした企てへの国家による支持と奨励は，純経済的法則が役立たなくなった分野で生産を促進する社会的諸規制である。」[52]

ところでこの「社会主義的原理」という表現は，いかなる意味で使用されたのだろうか。別のところで「社会主義的原理」は，つぎのように用いられている。

> 「組織された資本主義は，それゆえ実際には，自由競争の資本主義的原理を計画的生産の社会主義的原理によっておきかえることを意味する。この計画的意識

的に指揮された経済は，高度の可能性をもって社会の意識的干渉，すなわちほかならぬ社会の唯一の意識的で強制権力をそなえた組織たる国家の干渉下にある。」[53]（傍点隔字体）

これは，つぎの関連でのべられた。すなわち，これまで社会主義に反対する主要論拠は，私的所有者の利己心にもとづく自由競争のみが経済発展と技術更新を保障するということであった。しかし今日コンツェルンの指導者は，生産効率をあげるためコンツェルン内部で自由競争を排除し，計画的生産を試みる。それに対応して現代経営学（ニクリッシュやシュマーレンバッハに代表される――筆者）では，利己心にもとづく自由競争を「科学的計画法」におきかえる研究が進められている。こうして資本主義は，自分じしんで社会主義にたいする心理的反発を取り除き，社会主義の経済管理の原理を生みだす[54]。上述の「計画的産生の社会主義的原理」は，これに続いてのべられているのである。このことからわれわれは，ヒルファディングのいう「社会主義的原理」が自由競争の排除とともになによりも経営と経済の管理方法が科学化し計画化されている事実をさしていることをうかがい知る。この管理方法は，生産の最大効率を基準にしたもので，合理化の一環として探究されたのである。かくて合理化運動の観察から，ヒルファディングは経済および経営の管理が科学化し計画化されひいては社会的職務とみなされるようになったことを認識し，経済の管理と指導がすでに社会主義的内実をそなえるにいたったと結論する*。「社会主義的原理」という表現は，合理化運動の評価からえたかかる結論を集約したものにほかならない。

＊　1925年のハイデルベルク綱領演説において，ヒルファディングは，経済がしだいに公共的性格を有するようになったことを，シュティンネスコンツェルンの破産の処理が全ドイツ的問題になった事例をあげて説明している[55]。

経済のこのような社会主義的内実にたいしては，依然として資本主義的形態が対応している。ヒルファディングは，経済のこの関係から，国家の経済におけるあたらしい役割を指摘している。結論を先取りしていえば，彼は資本主義から社会主義への構造的改革をもたらすものとして，国家の経済干渉

を位置づけているのである。

ヒルファディングは，国家の経済干渉の意義を，私的利益をめざす資本家的組織と全体の利益を代表する民主国家とのあいだの対抗関係のなかにみる。上述の経済の社会主義的内実からいって，社会主義が時代の問題になっているという。

> 「……問題は，いかなる形でわれわれがその（経済と国家の― 引用者）相互浸透を形成するかにある。それは，われわれの世代が，国家の助力すなわち意識的社会的調整の助力をもって，この資本家によって組織され指揮された経済を民主国家によって指揮された経済に転化するという問題を提出されていることを意味するにほかならない。[56]」（傍点隔字体）

ヒルファディングは，この経済変革の道について，「社会改良が社会主義への道を切り拓く」とのべている[57]。そして「経済と国家の浸透の増加，経済の組織によってますます緊密化するその相互関係」が，資本主義から社会主義への構造的改革を内容としていることを明らかにしている。彼によれば，国家による経済干渉は，自由競争の時代にすでに租税，貨幣ならびに通商政策を内容として存在していた[57]。しかし「組織された資本主義」の時代における国家の経済干渉は，社会主義への改革との関係で，質的にあたらしい内容を獲得している。ヒルファディングは，その具体的事実として，いわゆる政治的価格と政治的賃金をあげる。

> 今やパン価格や肉価格は，経済価格であるのみでなく政治的力関係によって決定される政治価格である。しかしもっと重要であたらしいことは直接的にプロレタリアートの運命にかかわる領域，すなわち労働市場における国家統制である。革命の成果たる失業保険は，労働市場における需要供給の一定の調整を可能にする。今日われわれは賃金協約制度や仲裁裁判所によって政治的賃金規制，政治的労働時間規制をおこなっている。労働者の個人的運命は国家の政策によって決定される。したがってわれわれは労働者の頭のなかに，週賃金が政治的賃金であること，週末にいかに賃金が形成されるかは，労働者階級の議会の代表の強さ，議会外でのその組織と社会的力関係の強さにかかっていることをたたきこまなければならない[58]。

ヒルファディングは，この政治的賃金および政治価格を，社会と国家の意識的干渉下におかれた組織された経済においてはじめて可能になったものであり，あたらしい「大きな経済・社会・政治的意義をもった要素」だとのべている。前述のごとく，彼は「組織された資本主義」のなかに資本主義から社会主義への過渡的性格をみとめる見地から，労働力商品を中心とした市場価格機構への政治的介入に注目した。それゆえ国家の経済介入は，この見地から，他の分野にも進展してゆく性格をもっている。これについてヒルファディングの他の諸論稿や演説を参考にしつつのべると，彼は，第一に，前述のごとく国家によるカルテル規制の発展も考えていたといえる。第二に，農業の分野において，マルクの安定いらい「農業ほど国家の諸措置に依存した生産部門はほかにほとんどない」と指摘し，国家の介入の例として，ライヒスバンクによる農業金融とライヒ穀物機関――1926年に設立されたライヒ穀物取引会社？――によるライ麦価格の直接的管理をあげている[59]。すでに前稿で触れたように国や自治体の助成によって農産物販売を組織化し，価格を安定させることは，相対的安定期におけるヒルファディングの農業政策の一基本的要求をなしていたのである[60]。第三に，石炭・カリ産業における価格決定の国家的管理を，国家の経済干渉の重要な事実として指摘している[61]。石炭・カリ産業は，戦後革命期に制定された「炭鉱業規制法」(1919年３月）と「カリ産業規制法」(1919年４月）――社会化運動の遺産――にもとづき，ライヒ石炭評議会（Reichskohlenrat）やライヒカリ評議会（Reichskalirat）のもとに強制シンジケート化されており，価格決定にさいしてライヒ経済大臣の影響下におかれていた[62]。如上の評議会は社会主義者たちによって「経済自治体」（wirtschaftliche Selbstverwaltungskörper）とよばれ，社会主義への中間的過渡的組織形態とみなされたが[63]，ヒルファディングもその意味でこの事実に注目したのである。

このように政治的賃金決定のほか，ヒルファディングは，いくつかの分野において国家の経済介入の事実がすでに存在しているのをみとめ，それらを上述の社会主義的見地から評価している。そしてさらにその発展の方向が拡

げられると考えているのである。ところで彼のこうした認識のなかには，どういうわけかライヒと自治体の公企業活動が含まれていない。

国公有企業*は，金融業のほか電力，交通，合成窒素，アルミニウムなど重要な原料・動力・動脈部門における独占的地位を占め，その活動は，ドイツの合理化過程をささえる不可欠な部分を形成していた。とくに合理化が電化を前提にした工場生産の変革を重要な内容とし，この過程で中央発電所への動力生産の集中と全国的配電網の形成によって生産のより高次な社会化が進められたが，国公有企業は電力生産のほぼ80%を独占したのである。結局，ライヒと自治体の公企業活動は，1920年代のドイツ資本主義の危機に対応した独占資本の蓄積運動をささえると同時に，——株式会社形態をとり企業の運営が資本家に委ねられたことなどから——独占資本の拠点さえ形成した。そしてこの意味でそれは，いわゆる「国家独占資本主義」の萌芽的段階を特徴づけるものだったといえる。[64]

* ライヒの公企業活動は，政府出資の持株会社，合同工業企業株式会社(Vereinigte Industrie Unternehmungen A. G.) をとおしてなされた。ヒルファディングは，1930—1931年にこの会社を監督する地位についた。[65]

ところが管見のかぎりでは，ヒルファディングは，ライヒと地方自治体の公企業活動にほとんど触れていないのである。このことは，国家の経済介入に独占資本の蓄積運動の補強をみるのではなく，社会主義への過渡的性格を，一面的にみとめるヒルファディングの見解の限界性の一端を示しているといえよう。むろんヒルファディングは，公企業活動をまったく無視したのではないだろう。が，そうだとしても彼は，他の社会主義者たちと同様に，それを経済民主々義の萌芽のひとつとみなすか*，合理化運動にたいする国家と自治体の助成措置としてとらえたにすぎない。そして国家の経済介入の他の事実に較べ，とりたてて名をあげる必要性を感じなかったのである。

* ハイデルベルク綱領[66]のなかには，ライヒと地方自治体の公企業活動を助成する任務がのべられている。また1928年のF・ナフタリ編『経済民主々義——その本質方法ならびに目標——』においては，経済民主々義への道のひとつとして，公企

業活動が位置づけられている。[67]

キール演説におけるヒルファディングの「国家の経済介入」論は，かくて，国家を利用した資本主義の構造上の諸改良をおもな内容にしたものであったといえる。ところで彼のこうした見解は，独自の民主国家論にもとづいている。つぎにそれについて簡単に触れておこう。

ヒルファディングは，国家が支配階級の道具であるというマルクスの見解にたいして，これはあらゆる歴史に共通する国家形式をのべているにすぎず，「組織された資本主義」の時代に特有な国家論たりえないと指摘している。「現代国家の本質的要素は政党」にあり，この政党の役割の位置づけに現代国家論のポイントがある。マルクスの見解が貫徹するにしても，それは，「政党闘争が階級相互の闘争を反映するのにほかならず，それゆえ政党闘争が階級対立の表現である」かぎりにおいてである。

ヒルファディングは，政党の役割の強調から，国家の政策が資本家階級の意志を一方的に反映するものではなくなるとのべている。そして進んでは「全体の利益における経済の指揮と支配のための手段として国家を使用」し，労働者階級の増大する影響下に資本主義社会を服させることを主張する。[68]結局，ヒルファディングは，国家が全体の利益を代表する性格を兼ねそなえるにいたったことを力説し，こうした考えにもとづき社会主義への漸次的構造変化を指向するものとして，国家の経済介入を「組織された資本主義」に位置づけたのである。

以上，この項では，国家の経済的役割にかんするヒルファディングの見解を紹介してきた。彼は「時代の諸問題」において，ワイマール共和国内で労働者階級が強大な政治的影響力をもち，国家の政策決定に参加するようになったという認識を示し，経済民主々義へのひとつの道として，国家の経済介入を萌芽的に論述した。そしてキール大会での演説において，資本主義の組織化・計画化にしたがってしだいに経済管理が公的性格をおびるようになるとのべ，政治的賃金や政治的価格の存在をとりあげて，国家の経済介入を社会主義への構造的改革の道として把握したのである。

ヒルファディングの「国家の経済介入」論は，結局，経済の組織化と計画化→（全体の利益を代表する民主国家）→労働者階級の影響下での資本家諸組織にたいする国家による規制と改革，というふうに図式化することができる。こうしたヒルファディングの見解を評価するにあたって，われわれは，第一次大戦後ドイツにおける国家の経済介入の特徴をおさえる必要があるだろう。

当時のドイツにおいて，この項の冒頭でのべたごとく，生産の社会化の高度な進展と独占資本主義の危機とが絡み合わさり，そのことが国家の経済介入を強く要請した。この国家の経済介入の特徴は，おもにつぎのようにまとめることができる。国家は，第一に，戦後革命の成果たる社会政策上の制度的諸改革を実施するものとして，労資の経済的利害の「調停者」として機能した。第二に，独占資本の蓄積運動の補強者として，再生産の外的諸条件を整えるというこれまでの枠を越えて，再生産過程内部に積極的に介入した。つまり独占資本は，国家を再生産過程に組みこむことによって，それを蓄積運動の拠点にしたのである。

ヒルファディングは，このうち，第一次大戦後資本主義の政治的社会的危機から生じた制度的諸改革に，当時のいわば「国家資本主義」的な特徴を読みとったといえる。彼は，その点に注目し，さらに，組織化と計画化によって公共的な性格を帯びた経済の実体にふさわしい形態を付与すべきだという観点から，社会主義運動の展開によって，こうした制度的諸改革を拡大発展させることを考え，その延長線上に社会主義への漸次的変革を唱えたのである。われわれは，この意味で，ヒルファディングの「組織された資本主義」論が，のちの「構造改革論」に結びつくような性格を示しはじめたのをみる。そしてその点に彼の理論の欠陥を見いだすことができるのである。

ヒルファディングは，民主国家が全体の利益を代表する性格をもつという主張を唱えた。そしてそのさいどんな階級が政治権力を掌握しているか，また政治権力が独占資本といかなる関係にあるかを不問にふしている。このような見解は，国家の経済介入に労資の利害調停と和解を一面的にみる考えに

結びついている。そして労働運動の体制内化機構として社会政策上の諸改革を位置づける独占資本の要求と合致しているのである。ヒルファディングは，結局，国家をつうじての改良闘争が巨大な政治的経済的権力をもつ独占資本にたいし，国民を結集して戦う反独占闘争ひいては階級闘争の一環であることを理解しなかった。そしてそれが独占資本の利潤原理に抵触する場合には独占資本のはげしい抵抗をよび起こし，その結果改良闘争が制限にぶつかり，たんなる改良を越えた運動に転化せねばならなくなることを理解しなかった。ヒルファディングは，この点を見ず，労資の合議にもとづいた社会主義への漸次的変革を唱えた。彼のこうした見解はのちに，たとえば1928年の北西ドイツ鉄鋼争議――労働協約・調停裁判制度を反古にした[69]――，世界恐慌時における失業保険制度の改悪――ＳＰＤのヘルマン・ミュラーを首班とするワイマール大連合の崩壊にみちびいた[70]――など，現実によって反駁されることになるのである。*

＊　ヒルファディングの「組織された資本主義」論は，「管理通貨」と財投融資政策を含んでいるとはいいがたい。1929年いらいの大不況期におけるヒルファディングの行動は，むしろ彼が赤字財政や積極的な財投融資政策には反対であったことを示している。このことから，H・A・ヴィンクラーは，ケインズ的な「組織された資本主義」論の立場にたって，ヒルファディングの理論の不完全さを指摘し，ケインズ革命以前には一般に「組織された資本主義」の完全に発展したタイプについて語ることは無理だったと評価している[71]。なおヴィンクラーの所属する西独の"Gesellschaftsgeschichte"学派は，ヴェーラーやコッカをはじめとして，「組織された資本主義」の概念装置を用いた「先進的工業諸国」の比較史的研究を提唱している[72]。

43）R. Hilferding, Theoretische Bemerkungen zur Agrarfrage, in : Die Gesellschaft, 4. Jg. Bd. 1, 1927, S. 430.

44）R. Hilferding (Anm. 6), SS. 7～8.

45）加藤栄一『ワイマール体制の経済構造』東大出版会，1973，365～367ページを参照。

46）R. Hilferding (Anm. 6), S. 8.

47）拙稿「第一次大戦とヒルファディングの帝国主義論」(北大経済学研究26(3)1976・10）のⅤを参照。

48) R. Hilferding (Anm. 6), SS. 10～13.
49) R. Hilferding, Realistischer Pazifismus, in : Die Gesellschaft, 1. Jg. Bd. 2, 1924, S. 111.
50) R. Hilferding (Anm. 16), S. 168.
51) a. a. O., S. 170.
52) R. Hilferding (Anm. 43), S. 430.
53) R. Hilferding (Anm. 16), S. 168.
54) Ebd.
55) R. Hilferding (Anm. 10), S. 279.
56) R. Hilferding (Anm. 16), S. 169.
57) Ebd.
58) a. a. O., S. 169～170. なお政治的賃金論の萌芽は, Die Reichstagswahlen und die Sozialdemokratie. (Anm. 36), SS. 175～176, Programmrede auf dem Heidelberger Parteitag (Anm. 10), SS. 282～283. にみられる。
59) R. Hilferding, (Anm. 1), S. 289.
60) R. Hilferding, Handelspolitik und Agrarkrise, in : Die Gesellschaft, 1. Jg. Bd. 1, 1924, S. 126.
61) R. Hilferding (Anm. 2), S. 59.
62) 篠原一『ドイツ革命史序説』岩波書店, 1970, 154～155ページ, 塚本健『ナチス経済』東大出版会, 1973, 44～45ページを参照。
63) F. Naphtali, hrsg. v., *Wirtschaftsdemokratie. Ihr Wesen, Weg und Ziel*, 5. Aufl., 1931, S. 41 ff.
64) 塚本健, 前掲書, 75～81ページ, 東亜経済調査局編『独逸の国家企業』1933の第4章以下を参照。
65) 佐藤智三「『ワイマール共和制』末期のドイツ電力業の構造」(経済論叢90(6)1962. 12)58ページによる。
66) W. アーベントロート (註33), 190ページ。
67) F. Naphtali (Anm. 63), S. 59 ff.
68) R. Hilferding (Anm. 16), SS. 170～171.
69) 加藤栄一, 前掲書, 361ページを参照。
70) 大島通義「大恐慌初期におけるドイツの財政過程」(慶応大・経済学年報12, 1969) 348～365ページを参照。
71) H. A. Winkler, hrsg, v., *Organisierter Kapitalismus*, Kritische Studien zur Geschichtswissenschaft, Bd. 9, Göttingen 1974, S. 13.
72) これについては, 大野英二「『組織資本主義』論の問題点── 比較社会史の研究動

向 ――」（思想 No. 625, 1976. 7）を参照。

6. 以上，この節では，ヒルファディングの「組織された資本主義」論の理論構造について，まず一般像をあたえ，つぎに各論的にたちいって論述してきた。一般像のところでは,『金融資本論』で萌芽的に示された彼の「組織された資本主義」論が相対的安定期に1924年の論文「時代の諸問題」から1927年のキール演説までの推移のなかでいかに結実し豊富化されていったかをみた。各論では，農業問題，合理化，階級関係の変化，国家の経済的役割などを論点として，彼の「組織された資本主義」論が，相対的安定期の資本主義の現実にたいするいかなる取り組みのなかでは生じたかを示した。この項では，それらの小括として，相対的安定期の一学説たるヒルファディングの「組織された資本主義」論がもっていた理論的性格をのべることにしたい。

われわれは，前稿で，ヒルファディングが，自由競争の資本主義から「組織された資本主義」への移行をいい，さらに金融資本を「組織された資本主義」の支配的な資本形態として位置づけたことを指摘した。ヒルファディングのこうした見解のなかには，つぎのような問題が含まれている。つまり，ヒルファディングにあっては，19世紀末から第一次大戦までのいわゆる古典的帝国主義の時代がどう位置づけられるのか，という問題である。

古典的な帝国主義論の課題は，そもそもマルクスが「資本家的蓄積の歴史的傾向」で抽象的にのべた資本主義の最高で最終局面に対応するものとして，第一次大戦までの帝国主義の時代をとらえ，その特徴を体系的に理論化することであった。社会主義者たちは，この理論化の課題をさまざまな観点からはたそうとしたが，帝国主義が世界戦争に結びつくような方向性をもつと考え，それとの関連で社会主義への展望をみちびきだす点では，ほとんど共通の認識をもっていた。ヒルファディングも『金融資本論』では，第一次大戦までを金融資本・帝国主義の時代とみなし，それを社会主義への前段階だと特徴づけたのである。

ところが第一次大戦後，資本主義は革命の危機を切り抜け，あらたな安定と発展の局面をむかえたのであり，こうした事態のもとでは古典的帝国主義

論――第一次大戦までの帝国主義を社会主義の前段階と規定した――の理論的歴史的意義をあらためて問いなおさなければならない客観的要請があったといわなければならない。ヒルファディングは，このような事実経過から，いまや金融資本の理論体系に金融資本の完成形態を加えて「組織された資本主義」論を展開し，そして自由競争の資本主義に直接「組織された資本主義」の時代を対置するにいたったのである。このことから，古典的帝国主義の時代を社会主義の前段階とみる観点が稀薄になり，彼はむしろ古典的帝国主義を「組織された資本主義」への過渡的段階あるいは「組織された資本主義」の端初的で未熟な段階ととらえなおしているようにみえる。結局，ヒルファディングの「組織された資本主義」論は,『金融資本論』の論理の延長線上にある一方,『金融資本論』の当初の意図をこえて，第一次大戦と戦後革命を分水嶺にして資本主義のあたらしい発展段階を画す理論的性格をもつにいたったのである。*

＊ P. M. スウィージーは，1931年のヒルファディングの論文「資本主義的発展の固有の法則性」を例にあげて,「1910年と1930年とのあいだに生じたあらゆる変化にもかかわらず，ヒルファディングが1930年になってもなお,『金融資本論』[13]の議論をほとんど一言一句そのまま反復している」と指摘している。確かにヒルファディングじしんのべているように，この論文は『金融資本論』を簡単に要約したものである。しかしこの要約は「組織された資本主義」に収斂する形でなされており，それぞれの理論部分も『金融資本論』におけるのとはことなる位置づけをあたえられていることに注意せねばならない。

こうしたヒルファディングの「組織された資本主義」論は，古典的帝国主義の時代の位置づけにおいてむろん誤まっている。つまり第一次大戦前までの独占資本主義＝帝国主義段階がもつ独自な意義をみとめず，それを「組織された資本主義」への過渡期に解消してしまったのである。さらにまた「組織された資本主義」における資本主義の諸矛盾の緩和ないし解消を主張する点で誤まっている。「組織された資本主義」論のこの理論的難点は，序において簡単に指摘しておいたように，彼の「独占」論の欠陥に根ざしている。「組織された資本主義」論にたいするこれまでの批判もこの点に集中してきた。

コミンテルンは，第三期論とブハーリン批判との関連で「組織された資本主義」論について討論したとき，ヒルファディングらの「独占」把握にたいし，独占が競争を排除しないことをのべたレーニンの見解を対置し，さらに競争が現実に広範に存在する事実を列挙して批判したのである。*このような批判は，今日までつらぬかれている。そしてヒルファディングの「組織された資本主義」論が1929年にはじまった世界大恐慌と階級闘争の激化の現実によって，その誤まりを完ぶなきまで暴露されたというしめくくりをあたえる点で，おおかたの一致をみている。

＊　たとえば，M. ユェルソン（Joelson）の論文「独占資本主義か『組織された』資本主義か」は，ブハーリンやヒルファディングの「独占」把握に対置して，レーニンの見解――独占は競争を排除せずそれと矛盾・軋轢・対立関係にあること，金融資本と帝国主義が旧い資本主義の広大な基層のうえにたつ上部構造を意味することなど――をのべ，つぎのような独占と競争の対立関係の現実を列挙する。工業と農業のあいだ，工業間，地方間の不均等発展にもとづく広範な競争の存在。独占的連合体とアウトサイダーとのあいだの競争。カルテル・シンジケート内での割当競争。代替商品間，企業者と消費者のあいだの競争。トラスト間の競争。労資間の競争（階級闘争）など。このようにユェリソンは，「組織された資本主義」にたいし，競争の広範な存在の事実を対置して批判する。[74] ヴァルガの論文「独占形成の諸問題と『組織された資本主義』の学説」も，ほぼこれと同じ観点からの批判をおこなっている。[75]

とはいうもののわれわれは，その反面では，「組織された資本主義」論が第二次大戦後，種々の形で復活していることも看過できない。すでに指摘したように，ヒルファディングの「組織された資本主義」論じしん，現代の「経営者革命論」，「テクノラート支配論」，「構造改革論」さらには「修正資本主義論」などの萌芽を含み，それらを準備するものであった。如上の「組織された資本主義」批判は，基本的には正しいといわなければならないが，なお十分だとはいいがたい。のみならず「組織された資本主義」論の評価としても不十分な点を残しているのである。

前述のごとくヒルファディングの「組織された資本主義」論は，相対的安定期の資本主義に社会主義へいたるまでの永続的な発展段階をみとめ，第一

次大戦前の帝国主義をそれへの過渡的局面とみなした。われわれは，このような見解を，独占の理解の誤まりに根ざした資本主義発展の一面的評価だと論難しうる反面，第一次大戦後資本主義がレーニンの『帝国主義論』の枠をこえていっそう巨大な発展をとげていたことも無視できない。

たとえば独占資本同士の結合からＩＧファルベンや合同製鋼のように前代未聞の巨大独占資本が出現した。アメリカやドイツなどの合理化過程は，経済をあたらしい生産力水準にのせ，いわゆる現代的生産様式，生活様式を準備した。さらに石油，化学，電機，自動車工業の台頭は，産業構造の変化と経済の内包的発展をもたらし，資本主義のその後の発展方向を予示した。これらの過程は，中央発電所への動力生産の集中，コンビナート化を中心に，レーニンが『帝国主義論』を執筆した当時よりはるかに高次な生産の社会化の進展をともなった。そしてドイツでは，生産の社会化は，国家を独占資本の蓄積機構に組みこむ形で進展したのである。したがって第一次大戦後資本主義の分析は，巨大独占資本化の論理，生産力と蓄積様式のあたらしい関係を問うことなしに済ますことができない。われわれは独占体の運動を基軸にして第一次大戦後の資本主義のあたらしい諸問題とあたらしい発展を説明しなければならない。そして帝国主義のあたらしい発展とその諸矛盾を理論的に究明するなかで，資本主義の腐朽と寄生性，その死滅しつつある態様の具体的内容をあらためて問わなければならないだろう。

ヒルファディングは，相対的安定期における独占資本の再編強化と強蓄積運動そしてそれがともなった生産のより高次な社会化という現実を念頭におき，それを基盤にして「組織された資本主義」論を展開した。かかる「組織された資本主義」の視角は，種々の理論的難点を含みながら，前述のごとく第一次大戦後資本主義の発展を彼なりにある程度読みとることを可能にした。こうした現実認識との対応が，現代資本主義論の一系譜の源流として，ヒルファディングの「組織された資本主義」論に積極的な意義をあたえたのである。かかる彼の理論にたいする根本的な批判は，結局，われわれじしん，相対的安定期ひいては現代の資本主義を，独占資本のあたらしい展開を基軸に

して体系的理論的に把握することによって成就されるといえよう。

前稿でのべたように，両大戦間の「経済分析」の流れとして，コミンテルンの「危機」論と第二インターの「組織された資本主義」論というまったく対照的な性格をもった学説が生じた。その理由は，むろんそれらの依ってたつ理論的基盤の相違によるが，それのみならずおそらく両大戦間の資本主義の現代資本主義への過渡的性格にもよるといえよう。この時期に社会主義者たちは，古典的帝国主義論以後の「帝国主義認識」なり資本主義分析の視角なりを求めて，さまざまな理論的模索をおこない，かなりの興味深い論点を提供した。現代資本主義分析を課題とするわれわれは，古典的帝国主義論以後の学説史のこのような流れを客観的に整理することを要請されている。この節でわれわれが，相対的安定期の一資本主義発達史観としてヒルファディングの「組織された資本主義」論に包含されたあたらしい諸問題を意識的に取りあげたのもこうした理由からである。

これまでのヒルファディングの「組織された資本主義」論にたいする取り扱いは，総じて彼の「独占」把握の誤まりの批判に集中し，この理論が全体としていかなる理論的性格をもっているかについては，ほとんど関心が払われなかった。しかしわれわれは，如上の理由から，それらの批判をたんに承認して終えるわけにはいかず，すでに理論的に葬り去られたかにみえながら，現実にはむしろますます西欧社会主義運動に根をはってきているとさえいえるヒルファディング的な資本主義認識を，もう一度根底的に掘りおこしてみる必要があるのである。

73）P. M. スウィージー『資本主義発展の理論』都留重人訳，新評論，1970，330ページ。

74）M. ユェルソン「独占資本主義か『組織された』資本主義か」（「ブハーリン『転形期の経済学』批判」高屋正之助訳，叢文閣版，1930，付録）87ページ，103ページ，115～120ページ。

75）ヴァルガ「独占形成の諸問題と『組織された資本主義』の学説」（世界経済年報7，1929Ⅲ，経済学批判会議訳，叢文閣版，1930）466～472ページ。

<未　完>